

Agile 2012 参加レポート

株式会社 オージス総研
技術部 アジャイル開発センター 張 嵐

2012年8月13日～17日にアメリカテキサス州ダラスで開催された「Agile 2012」に参加した。カンファレンスの様子、参加したセッションの内容概要や感想をレポートいたします。

■アジャイルカンファレンスとは

アジャイルアライアンスはアジャイル開発を推進する NPO である。2011年に設立以来、毎年一回アメリカにて世界最大規模の国際的なアジャイルイベントであるアジャイルカンファレンスを主催している。このカンファレンスには、アジャイル開発の提唱者や著名人、アジャイル開発の実践者や入門者、アジャイル開発導入を検討している人などが、新しい考えや経験のシェアリング、会社の宣伝やアピール、参考にできるプラクティスやノウハウなど情報収集、人脈づくり、ビジネスチャンスの探求……様々な目的を持って、世界各地から集まり参加する。アジャイル開発のメッカとも考えられる場でもあるのではないかと思います。

■Agile2012 概要

Agile2012は8月13日～17日にアメリカテキサス州のダラスにある Gaylord Texan というリゾートホテルで5日間にわたって開催された。Gaylord Texan はダラス Grapevine の郊外に位置し、ホテルとコンベンションセンター併設の巨大な施設である。



ホテルからコンベンションセンターへ



会場外のロビー

図 1 会場の様子

今年のアジャイルカンファレンスはセッション数にして 207 の発表があり、同時間帯に 13 個前後のセッションが同時進行していた。アジャイル開発入門、導入の障害と克服のためのプラクティス、スケールアップのノウハウ、リーダーシップの育成、技術スキル、品質保証、開発事例、研究報告など、多岐にわたる内容が提供された。また、当日に発表時間を予約し、発表テーマをホワイトボードに書いて、非公式の発表場所として利用できる Open Jam、アジャイルコーチとの一対一の悩み相談所である Coaches Clinic も毎日開催されていた。プロジェクトに時間もしくは資金のいずれかで貢献するアジャイル慈善開発ラボもあった。



セッションの時間割表

図 2 時間割表

今年の参加者人数は約 1600 名であり、この内 90%程度はアメリカ国内からの参加ではないかと思われる。日本から 30 人ほどの参加者がいた。中国からの参加者は 10 名ほどで、4 名はボランティアの形式でカンファレンスの運営が参加していた。この大人数が一週間の間ホテルに閉じこもって、一緒に研鑽するというような雰囲気だった。



非公式な発表

セッションの様子

キーノートセッションの様子

図 3 セッションの様子

Agile2012 の講演者陣はとても豪華で、日本でも知られているような著名人も毎日会場で見えるというような状況だった。いずれの講師も友好的で、話しかけたら、気軽に対応してくれ、また、写真撮影の依頼にも笑顔で応じてくれた。サービス精神が高いと感じた。セッションの会場では、著名人が座って聴講している姿もしばしば目撃した。

アジャイル界の著名人のリストを以下表 1 にまとめた。

表 1 著名人の参加者

氏名	主要な貢献
Jeff Sutherland	スクラムの父。新著は「Software in 30 Days」。
Ron Jeffries	XP の名人。「Extreme Programming Adventures in C#」の著者。
Jurgen Appelo	話題の「Management 3.0」の著者。
Jonathan Rasmusson	「アジャイルサムライ」の著者。
Lyssa Adkins	有名な新進アジャイルコーチ。「Coaching Agile Teams」の著者。
Mary & Tom Poppendieck	「リーン開発の本質」、「リーンソフトウェア開発」などの著者
Robert Martin	職人肌。「クリーンコード」などの著者。
Bas Vodde	アジアで一番活躍しているスクラムトレーナー。「Practices for Scaling Lean」、「Agile Development や Scaling Lean & Agile Development」の著者。
Jez Humble	「継続的デリバリー」の著者。
James Grenning	「Test-Driven Development for Embedded C」の著者。プランニングポーカーの考案者。
Jeff Patton	スクラムトレーナー。ユーザストーリーの専門家。2011 年 Scrum Gathering Tokyo のキーノートスピーカー。
Henrik Kniberg	スクラムトレーナー。「Scrum and XP from the Trenches」、「Kanban and Scrum」の著者。2011 年 Scrum Gathering Tokyo のキーノートスピーカー。
Linda Rising	「Fearless Change」の著者。2011 年アジャイルジャパンのキーノートスピーカー。
Dean Leffingwell	「アジャイル開発の本質とスケールアップ」、「Agile Software Requirements」の著者
Scott Ambler	「アジャイルモデリング」などの著者。新著は「Disciplined Agile Delivery」。
Lasse Koskela	「Test Driven: Practical TDD and Acceptance TDD for Java Developers」、「Unit Testing」の著者。
James Shore	「アート・オブ・アジャイル デベロップメント」の著者。
Johanna Rothman	「Manage Your Project Portfolio」などの本の著者。
Alan Shalloway	「Essential Skills for the Agile Developer」、「Lean-Agile Software Development: Achieving Enterprise Agility」の著者
Jim Highsmith	「アジャイルプロジェクトマネジメント」の著者
Diana Larsen	「アジャイルレトロスペクティブズ」の著者
Esther Derby	「アジャイルレトロスペクティブズ」の著者
Rebecca Wirfs-Brock	オブジェクトデザインの専門家。CRC カードの考案者。「Object Design: Roles, Responsibilities, and Collaborations」の著者
Joseph Yoder	パターンコミュニティの活躍者

大規模イベントの開催では有カスポンサーの支援が欠かせない。今回もスポンサーの展示ブースがあり、カンファレンス期間中、アジャイル開発ツール、トレーニングサービス、コンサルサービスの展示、紹介があった。

Microsoft、IBM、Rally、VersionOne、CollabNet、Atlassian、ThoughtWorks などから主要なアジャイル開発支援ツールの展示があり、SolutionsIQ、 agile42 などトレーニングサービスを提供する企業の展示もあった。

アメリカでよく利用されているアジャイル開発をサポートするツール Rally と VersionOne については、残念ながら、近い将来日本語化する予定がないと聞いた。

■個人の感想

アジャイルカンファレンスを参加し、著名人の話を沢山聞いて、刺激を受け、勉強できたということだけではなく、自分の仕事の中で、似たような課題があるか、同じソリューションを持ってきて応用できるか、これからの業界の発展に関して、何を準備すればよいか、など考えさせられることも多かった。

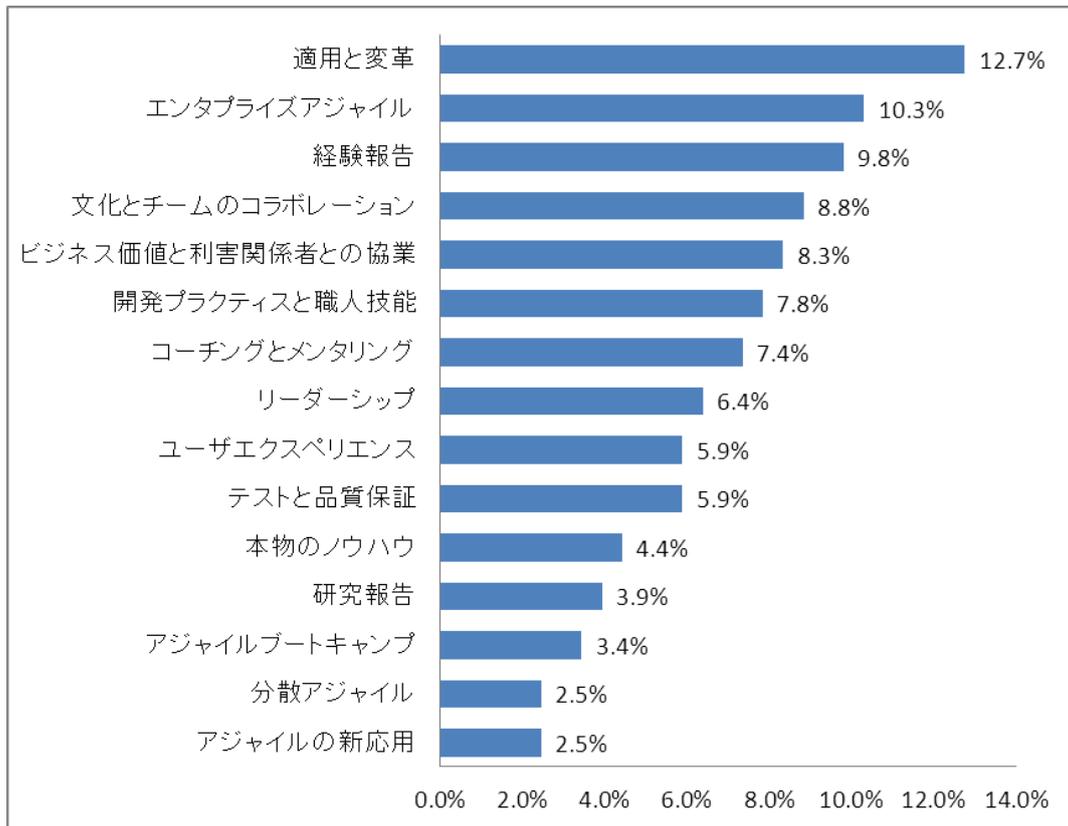


図 4 セッションの分類

アジャイル開発の現状について、図 4 のセッションの内容の分布から、アメリカではすでに導入の段階を超えたことが分かった。カンファレンスの内容は価値、マインドセット、プラクティス、スキルにフォーカスし、マネジメントと技術を強調している。また、今回の主要なキーワードは「Scale up」で、参加者たちが求めているのは組織にアジャイル開発を導入するためのソリューションではないかと思う。

アジャイル開発の目的は組織による価値の追求である。アジャイル開発で成功するために、マインドを変えることは非常に重要なことである。今までアメリカでも、あるいは日本でも、組織文化の変革、人々の意識の変革というマインドセットの変化を強調してきたが、プラクティスの正しい適用やマネジメント、技術のスキルも欠かせないということが今回沢山のセッションで強調された。

組織は教育や著名人の招待講演で、一夜にアジャイル的な組織になるということはない。一歩一歩着実にアジャイルを実践し (doing agile)、それから初めて being agile の状態

になれる。アジャイル開発で成功するための要素について、筆者は下図のようにとらえている。

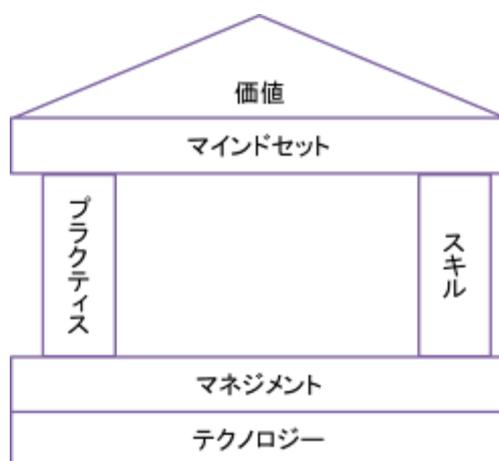


図 5 アジャイル開発の要素

アジャイル開発の動向として、今後「Scale up」に焦点にあたるのではないかと思います。そのために、価値の測定方法、正しい製品を作るための要求獲得手法、品質保証に欠かせないテスト手法、多国間の協力は注目なテーマである。

また、今まで、アジャイル開発は主にビジネス系の開発に適用しているが、今回は組み込み開発やハードウェアにかかわる分野にアジャイル開発の事例紹介や、必要な技術やプラクティスの紹介もあった。今後組み込み分野でのアジャイル開発の展開は注目すべきだろう。

■聴講したセッションの概要

今回、筆者は初日とキーノート以外のセッションに関しては、品質保証のテーマに関するセッションを集中的に聴講した。以下は筆者が参加したセッションの一覧である。

表 2 参加セッション一覧

参加日	セッションのタイトル	講師
Day 1	Is It Worth It? Using a Business Value Model to Guide Decisions 価値があるか？決定を導くためのビジネス価値モデルの利用	Kent J. McDonald
	ACT: A Planning Tool for Agile Change Agents アジャイルの変化と変革：アジャイルチェンジエージェントのための計画ツール	James Shore Jutta Eckstein Diana Lassen
Day 2	Keynote: Scaling up Excellence 卓越性の拡大	Bob Sutton
	The 0-Page Agile Test Plan 0ページのアジャイルテスト計画	Paul Carvalho
	Test System Qualities システムの品質をテストする	Rebecca Wirfs-Brock Joseph Yoder
	Continuous Delivery 継続的なデリバリー	Jez Humble

Day3	Creating Maintainable Automated Acceptance Test Suites メンテナンス可能な自動化受け入れテストスイートの作成	Jez Humble Badrinath Janakiraman
	Developers Exploratory Testing: Raising the Bar 開発者の探索テスト：レベル向上	Sigge Birgisson
	Integrating Agile with Other Enterprise Disciplines: Six Sigma, BPM & CM アジャイルとシックスシグマ、BPM、CM の結合	Jason Tice
	The Need for Build Speed ビルドスピードの必要性	Lasse Koskela
Day4	Acceptance Tests: Writing with the Future in Mind 受け入れテスト：未来を考慮し書きましょう	Jeff Morgan
	Case Study: Being Agile in an Embedded, Product-Line Environment 組み込み、プロダクトライン環境におけるアジャイル開発事例	Harry Koehnemann
	Velocity is Killing Agility! ベロシティは機敏さに害がある	Jim Highsmith, Pat Reed
	Adopting CMMI® into Your Scrum Methodology スクラムと CMMI のマッピング	Susan Strain, Lee McKinney
Day5	Adventures of an Accidental Entrepreneur. A High Tech Teleradiology Venture from India 偶然企業家の冒険：インドからのハイテク遠隔放射線学ベンチャー企業の成長	Sunita Maheshwari
	Managing a collaborative multi-national team in real time リアルタイムに協力し合う多国籍チームの管理	Joe Justice

キーノートセッションは2日目に1つ、最終日に2つ、計3つがあった。どれもソフトウェア開発と関係がなさそうの話だったが、その考え、やり方をソフトウェア開発でも参照できるところが多かった。

組織の卓越さを拡大するため、マインドセットを行動に反映することで組織の優位性を拡大することの重要性、拡大するための戦略的な選択ポイントおよび選択時のトレードオフの判断、拡大のための規律に関する説明が2日目のキーノートの主な内容である。

最終日のキーノートについては、1つ目はインドの遠隔放射線学のベンチャー企業の成長の軌跡に関する話である。リーンスタートアップの理念と膨らむ夢および信念を持って変化しつつ、小さなベンチャーから業界 No.1 へと成長したストーリーである。2番目のキーノートはスクラム、Kanban、テストファーストなどのアジャイル開発手法を利用し、スポーツカーを製造する事例紹介である。

また、他のセッションから得られた情報をまとめると、以下のようになる。

1. ビジネスの変化

ビジネスは変えなければならない時期がある。判断を下す時に、ビジネス価値モデルを利用できる。

迅速なリリースはビジネスに貢献する。それを実現するために、継続的なインテグレーション、継続的なデリバリーが必要である。

2. アジャイル開発における品質管理

テスターはアジャイルチームの一員。

テスト駆動開発によって、品質を作りこむ。

テスト計画の目的を明確にし、意味のあるシンプルな計画を作る。

テストはできるだけ自動化する。技術の進歩で、受け入れテストをサポートするツールも沢山ある。

テストは機能テスト、非機能テストともに重要である。まず、重視する製品の品質特性を定義する。

3. アジャイル開発の測定

アジャイルのメトリクスは統一した標準がまだない。

Velocity で生産性を測るべきではない。価値にフォーカスすべき。

アジャイル開発のプロジェクトを測定する場合、多次元の測定モデルを利用する。

4. アジャイルとほかの標準化の関係

アジャイル開発は PMBOK、シックスシグマ、BPM、CMMI などと矛盾しない。

5. アジャイルは組み込み開発での応用

正しいプロセスを選定し、正しいツールを利用し、組み込む開発分野でもアジャイル開発は十分応用できる。

6. Scale Up

単純な Scrum of scrum で、大規模案件の対応はできない。エンタープライズレベルの開発フレームワークを確立する必要がある。

■Agile2012 外伝

1. 開催地はどこにあるか？

Agile 2012 の開催地はテキサス州ダラスの近くにある小さな町 Grapevine である。

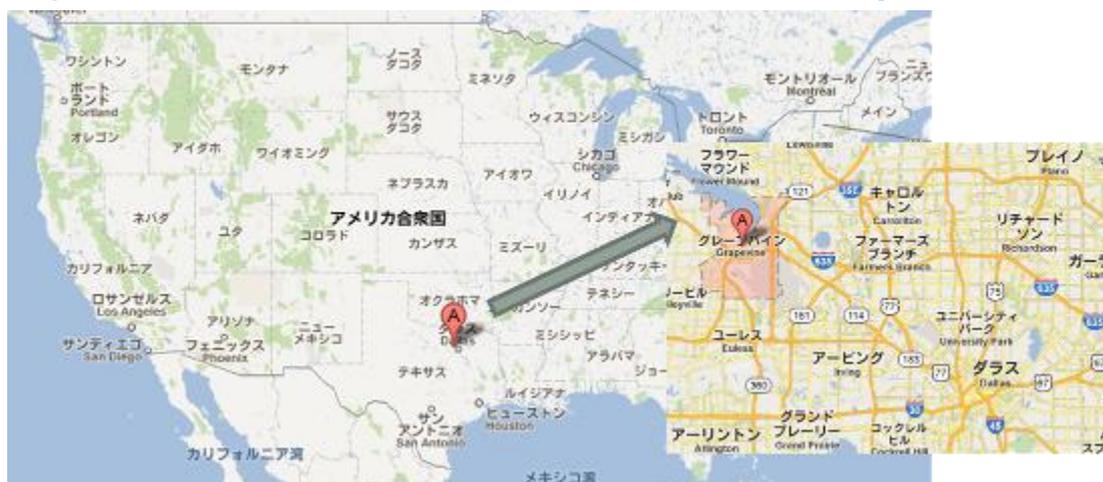


図 6 テキサス州 Grapevine

日本からダラス DFW 国際空港への直行便があり、Grapevine はダラス DFW 国際空港に近

いし、アクセスがしやすい。



図 7 Grapevine の風景

2. テキサスといえば、思い浮かべるのが何かあるか？
Cowboy、ステーキではないか。Agile2012 もテキサス風アレンジされた。



図 8 テキサス風



図 9 食事の風景

3. 一週間のカンファレンス、退屈ではないか？

毎日セッションに参加したり、いろんな国からの参加者と対話したり、大変充実な日々を送った。8月16日にカンファレンス終了の前日の夜に、パーティに参加するため、初めてホテルから出た。気が付いたら、テキサスに来てから外の空気を吸ったのは初めてではないか。



図 10 ひと休み

4. カルチャーショックはないか？

筆者はホテルに着いて、エレベータを乗る時に、ボタンをいくら押しても、エレベータが動いてくれなかった。もしかしたらカードが必要ではないかと思い、カードの挿す場所も探したが、見つからなかった。ボタンって、分かる？



図 11 エレベータのボタン（黒いのはボタンではない）

■Continuous Learning

Agile 2012 は筆者にとっては、一言でまとめると、Continuous Learning の場である。沢山のことを吸収したので、今後の仕事に反映したいと思います。

この場を借りて、日々自分の仕事を支えていただいている上司、同僚に感謝いたします。